



「ここだけの話」は専門医が持っている 「得意分野のピカイチネタ」

評者 | 杉田 学 順天堂大学医学部附属練馬病院・救急・集中治療科／教授

2021年8月。われわれ東京で働く救急医にとって、普段の救急医療に加えて新型コロナウイルス感染症の対応、東京2020オリンピック・パラリンピックの医療救護体制への参加が加わり、前年から一貫してとても忙しい毎日であった。医療従事者のワクチン接種はおおむね完了したが、自由に外出できる状況ではなく、日々ストレスを感じていた。私は救急医であり、また感染対策室長も務めているため、毎日新たな感染症関連のエビデンスを収集し発信していた。そんななか、坂本壮先生から、田中竜馬先生と編集にかかったという本書を紹介され手に取った。

『救急外来、ここだけの話』。その題名に釣られてエッセイを読むようにページをめくってみたら、なんと中身は「超硬派」であった。そうか「ここだけの話」とは、スキャンダルでもオモシロ経験談でもなく、専門医がもっている「得意分野のピカイチネタ」なのかと納得した。特筆すべきはその読みやすさで、エビデンスが確立していることだけでなく controversial な話題にも触れ、「救急外来での最初の数時間をどう過ごすか」に焦点を当てている。「忙しい」「忙しい」という毎日ではあるが、勤務時間には終わりがくる。飲みにも行けず家で過ごす間に読破できてしまった。面白かったし、パクって研修医に話してやろう、というネタも増えた。

研修医だけでなく指導医の“武器”にもなる書

考えてみると、救急外来での初療ってこれだけの知識を身につけなければならぬってことなのだ。本書には、成書にある病気の急性病態だけをまとめて、症候学とともにギュッと凝縮し、最新のトピックと専門家のテクニックを詰め込んである。救急外来で初療に当たる時には専門性より、いかに多くの疾患を思い浮かべることができるかの勝負になる。そういった意味では、本書のターゲットは経験の浅い医師だけじゃない。むしろ、それなりに経験を重ねて、いつのまにか指導する立場になった医師にこそ必要かもしれない。

2004年に改定された新臨床研修医制度では2年間のローテーションが必修とされ、これ以降に研修を修了した医師は（坂本先生もしかり）、専門科にかかわらず初療に強い医師が多いと感じる。この世代が医療の最前線を支えているのだなと、つくづく実感する。若い世代が本書のような武器を持つとすればさらに心強い。

ビデオ会議で偉そうにしゃべる私の背後に本書が映っていても、ツッコましいでほしい。われわれ世代も、この本で勉強させてもらおう。知識のアップデートには、このような良書が必要だ。本書は初期研修医から指導医まであらゆる世代に必要な良書であると、あらためて確信する。



救急外来、 ここだけの話

坂本 壮、田中竜馬＝編

定価：5,720円（本体 5,200円＋税 10%）
B5判・480頁／医学書院／2021
[ISBN978-4-260-04638-1]